

謎深き馬

鈴木将史

日曜午後の昼下がり、長椅子に寝転がってよく競馬中継を見る。いろいろな競走競技がある中、人間も含めて走る姿が最も美しい動物は競走馬ではないかと思っているので、ただ見ているだけでも楽しい。手ぶらで見ても面白いのだから、馬券を握りしめて見たらどんなに楽しかろうと、一度買って見たこともあるが、楽しいどころか金銭欲にまみれた興奮の余り不快になったので、それからは見るだけにしている。

それにしても、毎年国内で10000頭以上も生産されるという競走馬は、その名前も当然のごとく千差万別である。中にはどう見ても手抜きが冗談半分でつけられたような名もあるが、「マツリダゴッホ」とか、「ステキシンスケクン」などというおちゃらけた名前をつけられながら、腐ることもなく必死に走る馬を見ていると、なんと健康でいじらしい。しかし時には輝かんばかりのネーミングも見受けられ、近年JRAを席卷した「ティーピンパクト」などは、その異次元の走りを見事に表現した名前として秀逸な出来であろう。思うに短歌や俳句といった短詩形に抜群の冴えを見せた日本人には、元来ネーミングやコピーライティングの才覚が備わっているようである。そうした才能は、例えば「振り逃げ」、「押し出し」といった野球用語などに遺憾なく発揮されているし、「liberty」を「自由」、「society」を「社会」と訳した感性にも反映されていよう。ミリタリーオタクのケが若干ある私などは、ドイツ語で「Flugzeugträger」、英語で「aircraft carrier」と呼ばれる軍用艦船、訳して「航空機輸送艦」を、「航空母艦（空母）」と命名する日本人のセンスに思わず

唸ってしまうのである。

そうした数年前のある日曜日、例によって横になり競馬中継を眺めていた私だが、ある一頭の馬の名にむっくりと起き上った。「マイネレーツェル」。敏感に反応してしまうのは商売柄致し方ないが、これはドイツ語だ。競走馬名の大多数は日本語でなければ英語系であり、そこに時折「オルフェブル」（フランス語系）とか、「ヴィルシーナ」（ロシア語系）など他言語系が混ざったりするが、ドイツ語とは珍しい、それも和洋折衷ではなく完全なドイツ語、すなわち „Meine Rätsel” である。意味は当然―「私の謎」―。出走したレースは「桜花賞」だったので、牝馬である。つまり、「謎めいた女」ということであり、これはなんと蠱惑的な名前なのであろう。競走馬に冠するには惜しいほどの意味深な名である。名前を聞いて、私は一気にこの馬が好きになったのだが、次の瞬間、さてこの所有冠詞変化は正しいのかしらという、ドイツ語教師ならではの身も蓋もない興味を抱き始めた。

辞書を覗いてみると、„Rätsel” の性は女性ならぬ中性とある。ああやっぱりね、と思った。やはり間違いか。巷にはカタカナネーミングが溢れており、英語から取ったものでさえ、妙な名前が少なくないというのに、ドイツ語由来のそれとなると、正確なものの方が少数派であろう。大抵端折られてしまうのが、冠詞や形容詞の変化語尾であり、私の街にも以前「ノイ・ブルスト」と称する肉料理店があったが、その類である。同様に「ノイシュロス」というリゾートホテルも高台にある。そうした例は、まあ固有名詞として目くじらを立てる必要もないが、私がどうしても解せないのは、かつてのJ1に登録されていたサッカークラブ「横浜フリューゲルス」なのだ。1998年の天皇杯優勝を置き土産に解散し、横浜マリノスに吸収合併され、今では「横浜F.マリノス」にその頭文字 „F” のみを残すに過ぎない伝説のサッカークラブである。このクラブは実業団クラブだった「全日空横浜サッカークラブ」を前身とするため、Jリーグ加盟時にチーム名を「翼」のドイツ語訳としたことは大いに買う。だがチームの複数形を表すために „s” をつけたのは全くいただけない。完全な独英混同名になってしまった。„Flügel” という名詞は単複同形なのだから、そのまま「横浜フリューゲル」でよいのだ。Jリーグ加盟クラブには、「川崎フロンターレ」とか、「東京ヴェルディ」とか „s” がつかないクラブがいくらかあるのだから、殊更「フリューゲル」に無料な「ス」をつける必要がどこにあらう。野球に目を転じるがいい。広島ของทีม名は、「鯉」の英語名が単複同形であることを踏まえて、ちゃんと「カープ」になっているではないか。

と、「レーツェル」をきっかけに「フリューゲル」まで考えを進めた時、私ははたと気が付いた。賢明な読者諸氏には既に気づいておられた方も少なくはないであろうが、ひょっとして、「レーツェル」は単複同形なのではないか？性は調べたが、すぐ隣の複数形までチェックはしていなかった。再び辞書を開くと、果たして単複

同形だ。そうだった、忘れていた。„-el“で終わる名詞は、„Formel“や、„Kugel“や、„Schüssel“といった少数の例外を除いて、その殆どが単複同形なのである。„Rätsel“も例外ではなかったのだ。とすると、„Meine“の変化語尾 „e“は、女性名詞ではなく、複数形に応じたもので、文法的に間違っていない。そうか、なるほど。「謎」はいろいろあったのだ!

謎深き女、マイネレーツェル。この名の真意に私は一層魅了され、そして上級ドイツ語履修学生でもうろ覚えの所有冠詞複数形語尾 „e“と、単複同形名詞を組み合わせて完璧な名前を作り上げた馬主の高度なドイツ語知識に深い敬意を払いつつ、私はこの馬のその後を見守り続けた。もっとも彼女の以降の戦績は鳴かず飛ばずであり、結局 29 戦中 4 勝 (重賞未勝利) という平凡な記録に終わっている。「マイネレーツェル」という彼女の名はしかし、毎年あまた量産される競走馬の名前の中で、私にとっては特別な輝きを今も尚、放ち続けているのである。

(後に判明したのだが、この馬の馬主サークルは、おしなべて牝馬には「マイネ」、牡馬には「マイネル」と命名するそうである。メスに「マイネ」は正しくとも、ならばオスには「マイン」だろう。やはりさして深いドイツ語知識から命名された名ではなかったようだ。深読みし過ぎた。アホらしい。)

(小樽商科大学教授)